

令和5年(2023年)3月4日

令和4年度長野県蘇南高等学校・卒業式式辞

モスクワはどこにある？

◇はじめに

本日、ここに令和4年度長野県蘇南高等学校の卒業式を、向井南木曾町長様、貴舟大桑村長様、岩久中津川市教育長様をはじめとする大勢の来賓の皆様のご臨席をたまわり、挙行できることになりました。深く御礼を申し上げます。

まず、お子様の高校卒業という大きな節目を迎えた保護者の皆様に、心からのお祝いを申し上げます。いくつもの壁を乗り越え、今日、ここで、お子さんの新しい旅立ちの瞬間に立ち会っているのだと拝察します。本当におめでとうございます。

そして1・2年生の皆さん、今日が3年生と過ごす最後の日です。みんなで心を込めてお祝いしましょう。なお、カナダ語学研修に明日出発する2年生たちは、感染予防のために自宅からオンラインで参加していることを申し添えます。

◇イヴァノヴィチ・アレクサンドルの強制労働

卒業生の皆さん、心から、卒業おめでとうございます

私は皆さんと一緒にこの蘇南高校に来て、この3年間ずっと、高校生活を一緒に過ごしてきました。

折々に、たくさんのお話をしてきましたが、今日は私の最終講義です。

現在の世界は、ロシアのウクライナ侵攻の行方を緊張しながら見つめています。そのロシアで、今からちょうど90年前の1933年、イヴァノヴィチ・アレクサンドルという男が、無実の罪で逮捕され、5年の懲役刑を受けて、強制収容所で奴隷のように働かされていました。

当時のソ連は、史上初の社会主義国家であり、工場や農場が公有(みんなのもの)であり、そこで働く労働者は「平等」であるという理想をかかげていました。しかし、生産手段をみんなのものとする社会は、それを管理する共産党の権力を巨大化させました。党の指導者スターリンは、自分にとって危険だと思われる者をことごとく処刑したり強制収容所に送ったりしていました。ソ連の人々は、少しでも自分が無事であるために、自分の友人や仲間を「スパイだ」と密告し、自分だけ助かろうとしていました。

イヴァノヴィチ・アレクサンドルもまた、仲間の密告によって突然逮捕されました。無実を訴え続けましたが、裁判では一切聞き入れられず有罪となり、冬はマイナス35度を下回る極寒の地で、バルト海と白海をむすぶ全長227kmのスターリン運河を建設する強制労働を命ぜられました。わずかなパンとキャベツが一切れ浮かんでいる程度のスープしか与えられず、昨日まで生きていた隣の人が、朝目覚めると冷たくなっていることが日常茶飯事でした。寒さのために多くの囚人が凍傷になり、身体が腐敗して、いのちを落としていきました。

強制労働を3年半続けたとき、イヴァノヴィチは、奇跡的に刑を減らされて釈放され

ました。彼は列車に乗ってレニングラード（現サンクトペテルブルク）に降り立ちました。そして本当にやりたかったことを行動に移します。それは古本屋に入って「ロシア語・フランス語辞典」（ロシア語のことばをフランス語で説明した辞書）を買うことでした。念願の辞書を手にしたとき、「懐かしい友」に再会したような感動をおぼえました。

そしてソ連の首都モスクワに行きます。でも自分がこれほどスターリン独裁の犠牲になり、辛い目に合ってきたのに、モスクワの人々は、「食べて寝ること」だけしか考えておらず、「いかに生きるか」を考えていませんでした。イヴァノヴィチは、かつて捨てた自分の祖国に戻るしかないと決意して、処罰されることを覚悟で日本大使館に駆け込みました。自分は日本人で、本名は勝野金政だと名乗ったのです。

勝野さんは、早稲田大学を卒業後、パリ大学に留学し、その後、社会主義にあこがれてソ連のモスクワに渡り、そこで逮捕され、強制労働に服してきたのでした。

◇勝野金政の「モスクワ」

1934年の夏、勝野さんは日本に帰国しました。語学が天才的にできる彼は、陸軍参謀本部に雇われ、ソ連をはじめとする世界の情勢を分析する仕事を命ぜられました。そして彼は自分の過酷な経験を本にまとめ、ソ連の危険性を社会に訴えました。

アジア・太平洋戦争の敗北が濃厚となるなか、勝野さんは、自分が生まれた故郷に家族を連れて疎開しました。43歳のときです。移住先の故郷とは、この南木曾でした。

このとき勝野さんを信頼する経済人や学者たちが、南木曾の妻籠に疎開をしてきます。彼らは文学・演劇・哲学など、最先端の文化を妻籠にもたらし、戦後の新しい日本はどのような国になるべきかを村の人々と活発に語り合いました。妻籠に日本で初めての公民館ができ、やがてこんにちの日本遺産の指定につながる美しい町づくりにつながっていきます。

しかし、勝野さんが本当にしたかったことは、別にありました。勝野さんは、この南木曾の地に、新しい学校を作ったのです。名前は、木曾産業学校。校舎の隣には製材工場があって、地域の一番の魅力である木曾ひのきを使った工場実習ができました。サイエンスを学ぶとともに、地域の人々がどうやって幸せになるかを行動しながら学ぶ学校でした。校長には北海道大学教授であった森本厚吉をスカウトしました。

しかしここでも壁がたちはだかります。勝野さんが集めてきた学校の教師たちが、ソ連を裏切った勝野を学校から追い出そうとして、ストライキや辞職を強行し、わずか1年で学校は閉校となってしまったのです。さらに追い打ちをかけるように大きな蛇抜け（土石流災害）が起こり、製材工場はすべて流されてしまいました。莫大な借金だけが残りました。

その後、勝野さんは木材会社の経営に専念して生涯を送りました。必死に働いて借金を返し、奥さんや子どもたちを守る父親として南木曾町で暮らし続け、1984年に83歳で死去しました。亡くなるときには「モスクワ」とつぶやき、ひとすじの涙を流したそうです。

「モスクワの夢」を抱いた自分の人生が失敗だったと思ったのか、「モスクワの夢」はまだあきらめていないと思ったのか。

おそらく後者だったと思われます。勝野さんの遺言には、こう書かれていました。

——インターナショナル、ヒューマニズムは、今後も人間の理想として立派な人が受け継いでゆくだろう。ヒューマニズム、インターナショナルよ、永久に生きてくれろ。

◇コロナ禍に囚われ、あきらめなかった皆さんの高校生活

さて、勝野さんの学校がつぶれてから6年後、この地域の五つの村が資金を出して蘇南高校をつくりました。

そして、勝野さんが亡くなってから36年後、2020年4月7日、蘇南高校に卒業生の皆さんが入学してきました。世界を新型コロナウイルス感染症の猛威がふるっているただなかです。勝野さんのような、生きるか死ぬかではないまでも、皆さんは入学式の3日後の4月10日から約2カ月、自宅に閉じ込められました。そして3年間、コロナ禍のなかで不自由な高校生活を送ってきました。…2年生までは練習試合も自由にできなかった。インターンシップや合唱コンクール、カナダ語学研修は中止。ランチ・タイムは黙食。…追い討ちをかけるように1年次の夏は大雨のために中央西線が再開できなくなり、長期の学校閉鎖に見舞われました。2年次にも夏と冬に感染予防のための学校閉鎖がありました。

しかし、皆さんは決してあきらめなかった。学校閉鎖のときには、通常の時間割で朝から夕方までオンラインで授業に参加しました。集中力を維持するために必死にさまざまな工夫をし、わからないところをわかるようになるための試行錯誤を懸命に重ねました。そしてコロナで互いが傷つかないように予防につとめて、この三年間、一度も校内クラスターを発生させませんでした。

そして皆さんはわかっているはずです。自分のこの3年間は、父母をはじめとする家族の優しさに包まれてこそ、そして先生方や地域の人々に支えられてこそ、歩んでこられたのだということ。

ところで、勝野さんの学校が失敗したとき、校長の森本厚吉は東京に行き、新しい学校をつくりました。その流れをくむのが、現在の新渡戸文化学園高校です。一度ホームページを見てください。学校のモットーが目にとびこんできます。

——私と世界のしあわせをつくりだそう。

では、皆さんのモットーは何でしょうか。森本の学校ととても共通する内容ですよね。

——未来の人々のしあわせのために努力する開拓者になる。

そして皆さんは、コロナ禍などに負けずに学び続け、未来の人々のしあわせを思い描いて、「総合探究」で実にさまざまな探究活動を重ねました。ホテルの養殖、水田の水量調節装置、地域の特産物を使った商品開発、獣害予防のハザードマップ、英語の観光案内、ジェンダー平等のための校則改革などなど。人々の幸せを大切にする生き方のことを、「ヒューマニズム」と言います。

そして戦争に苦しむウクライナの人々のために文化祭の売り上げを送金し、ウクライナの救援活動に献身しているポーランドの坂本さんにエールを全校で送りました。国境をこえて人々と手をむすぶことを「インターナショナリズム」と言います。

つまり、皆さんは、勝野金政さんの夢——地域や世界の人々のしあわせのために努力する生き方——を、いつの間にかここ蘇南高校で目指していたのです。勝野さんが最後につぶやいた「モスクワ」、つまり人々のしあわせを願う街は、皆さんひとりひとりの心のなかにあるのだと、私は考えています。

◇「開拓者」は仲間と出会う

残念ながら世界はあまりに課題が多い。戦争、地球環境破壊、少子高齢化、地域の人口減少、ジェンダー不平等、貧困、そして感染症……。

でもだからこそ、皆さんは、それぞれのふるさとで、自分が人から支えられていることに感謝の思いを持って、かつ、人々のしあわせのために努力する生き方を、これからも続けていってください。

皆さんが「開拓者」である限り、きっと同じような「開拓者」と出会い、互いに手をとりあいながら、目の前の壁に立ち向かっていけるはずなのです。「開拓者」は、必ず「開拓者」の仲間と出会うのです。勝野金政さんが36年の時空を超えて皆さんと出会ったように。

もし万が一、どうしても世界で独りぼっちになってしまったように思ったら、SOSを発すれば、私が皆さんのところに会いに行きましょう。蘇南高校に自分の時にいた小川校長先生の連絡先を知りたいと連絡をすれば、大丈夫です。私も「開拓者」として、皆さんの仲間であり続けますね。

では皆さん、長野県蘇南高等学校から2023年のふるさと、世界へ羽ばたいてください。

皆さんの人生の旅を、私はいつまでも、心から、応援し続けます。

令和5年（2023年）3月4日

長野県蘇南高等学校長

小川幸司

参考文献

稲田明子・加藤哲郎ほか（2001）『勝野金政 生誕百年記念シンポジウム（資料）』早稲田大学。

勝野金政（1934）『赤露脱出記』日本評論社。

勝野金政（1977）『凍土地帯へ』吾妻書房。

加藤哲郎（1994）『国民国家のエルゴロジー』平凡社。

関口存男（2019）『セレクション 関口存男 ニイチエと語る』三修社。

「勝野金政 web 記念館」<http://katsuno.life.cocan.jp/>（2023. 2. 23 最終閲覧）